



水にあらずよ滝壺に落つるまで
 奥山源丘
 万緑や千年後の句碑見たし
 大野今朝子
 逃水へ古稀ばうばうとはるばると
 依田ひろ
 女郎蜘蛛魔笛のごとく迫りくる
 芳川莞久子
 一切れの青挿そへて老漢へ
 村田朋美
 偷生のわれ何為さん沖繩忌
 百瀬石涛子
 雷鳥の草分けの歩を憚らず
 岩上諒磨
 今生はひとり身長しさくらんぼ
 小松市子
 顔振って汗を払ふや刀鍛冶
 小谷一夫
 よるべなくまた風入るる夜会服
 竹岡みち子
 滴りや八ヶ岳の地底に御座す弥陀
 小泉千波
 黒南風や声をひとつに曳家衆
 日高礼子
 引出しの余白は未来夏に入る
 佐久間梨江

短夜や沈むもならず漂へり
 山崎和之
 葛切や雲生んでゐる煙の木
 柁木幸子

悪態をつく舌 六月の女
 金子圭子
 夜濯の黒ばかりなる自嘲かな
 森山夕香
 尾の長きさすが江戸前穴子鮨
 渡辺文野
 金魚玉眠れば老いのすすみたる
 辰野利彦
 ぶよぶよの月昇り来る半夏生
 児玉君子
 潮干狩電車の床に座り込む
 下平重人
 一生を一日に縮め夏椿
 原保次郎
 みず叩き食うべ身ぬちのさらさら
 山田一政
 東大寺螺髪のそよぐ夏来たる
 吉澤清
 玻璃越しの魚のぎよる目や宵闇魔
 原田宏子
 五月闇エレベーターにひだる神
 古畑富美江

夜蛙の勝鬨善光寺平
 関礼子
 つまらない手紙を出して四十雀
 細江毛玉
 降り止みて空気はジュエルや仏桑花
 松井弓
 青春のフィナーレに似た晩夏光
 楠木ひろこ

——同人集・岳集・青雲集から

巻頭寸言 ITに関することが氾濫し、文学や俳句を論じた文章もすらすら理解できないことが多い。私は、俳句は手書き、文章はパソコンを利用する。推敲・添削などが自由自在であり、その恩恵に浴している。しかし、どれだけ躓くとか、編集長や身内から知恵を借りてどうにか仕上げているのが現状である。多分、私は残された時間もこの手でやり過ごすのではないかと思う。今、感心しながら読んで、「言語の本質——ことばはどう生まれ、進化したか」(今井むつみ・秋田喜美、中公新書)を紐解くと、まず「アイコニック」に躓く。ごく卑近ない方をすると、温泉と砂マークとの関係(対象と対象を指示する記号との「似ている」関係のこと)。これは何となく理解できるが、私の俳句の鑑賞や批評は一切、自分が理解できない難しいことは用いないつもりである。俳句に関しても、なんでも言えればいいのではない。なんでも自由、これも私は、ITの普及による世の中の「狂気」ではないかと思う。

水にあらざる水——滝壺に落ちる水の持つ超越性

水にあらざる水 滝壺に落ちるまで 奥山 源丘

鋼のような水。水にして水にあらざる。滝壺に落ちるまでの異常な緊張を捉えて巧みだ。この感覚は滝を想像するとよく

なさんとするか。自戒に悶える句と読める。シベリアから帰還し百歳を目前にした感慨や深し。優れた俳人である。

雷鳥の草分けの歩を憚らず 岩上 諒磨

深山亜高山帯に生存する雷鳥の歩みはつねに新天地を拓く趣きがある。雷鳥を詠い、諒磨本人のパイオニアを指す密かな矜持の句と見たい。素直さに大いに注目する。

今生はひとり身長しさくらんぼ 小松 市子

いささかの諦観に軽く季語さくらんぼを添えたものか。早く連合を亡くし、寺のお大黒さんとして後継ぎが得度するまで大変ご苦労を重ねた。そこを明るく、「ひとり身長し」とさりと詠んでいる。俳句作りに精進した作者の優れた知性とそれ以上の悟りがある。真似できることではない。

顔振つて汗を払ふや刀鍛冶 小谷 一夫

些細な「顔振つて」の描写に行き届いた配慮がある。刀鍛

今月の秀句

万緑や千年後の句碑見たし 大野今朝子

掲句は建立していただいたわが「はらわた」の句碑詠。多賀城の壺の碑は芭蕉が感銘した「千歳の記念」として名高い。大それた想像で恐縮であるが、句碑のみが千年後も残る光景はそら怖ろしい。どんな人類が見るのか。それまで風雪に耐え得るのか。ただひたすら「自然」を望見する思いである。

理解できる。滝壺に落ちてから本来の水に戻るとは、説得力がある。滝の実態を表現しながら滝以上のことを暗示する。「緊張と弛緩」。優れた俳句はこのような含蓄を持つ。

逃水へ古稀ばうばうとはるばると 依田 ひろ

古稀(七十歳)を迎えた。その感慨は「ばうばう」(茫々)と「はろばろ」(遙々)だという。春の日に立つ陽炎の類「逃水」。来し方を思い、未来を望み、逃水を連想した。人生百年の現今、七十歳はいよいよ充実の齢である。無限の意欲が滲む句と讃えたい。

女郎蜘蛛魔笛のごとく迫りくる 芳川莞久子

連想に迫力がある。「魔笛」の比喻により恐怖心が大気に滲み、全身をがんじがらめにさせられる。纏いつき身動きがとれない。デフォルメされた女郎蜘蛛が超現代を思わせる。

一切れの青挿そへて老漢へ 村田 朋美

「青挿」は青麦穂を炒る。上手に搗いて粘りを生かした夏の菓子。素朴な香ばしい味が喜ばれる。一杯の茶を供されたものか。風味よろしき巧者。鋼に関する専門家の作。

偷生のわれ何為さん 沖繩忌 百瀬石清子

「偷生」とは李陵「答蘇武書」に出る故事による。恥を忍んで長らえる意。死ぬべきいのちをおめおめ生きて一体何を

治の真剣な面ざしが見える。江戸時代以来、職人詠の俳句が俳句の表現技法を支えてきたのではないか。

よるべなくまた風入るる夜会服 竹岡みち子

ローブデコルテのような正式な夜会服。今年も着る折はないが、風入れだけは怠らない。華やかな時がみるみる過ぎてゆく哀歎。連合いも齢を重ねた実感を込めているか。かつて信州新町の美術館で有島生馬夫人のそれを見た感慨を連想した。

滴りや八ヶ岳の地底に御座す弥陀 小泉 千波

スケールが大きな作に感心した。一滴の水が弥陀の采配とは、自然への信仰心の深さの表現であろう。

黒南風や声をひとつに 曳家衆 日高 礼子

曳家衆とは江戸時代の火消し役以来の伝統がある。梃子とコロを巧みに組み合わせ、家や時にビルを持ち上げ、動かす。職人芸の極致。ベテランになると声ひとつで力が揃う。梅雨最中の緻密な配慮と心意気が天地を動かすのである。

引出しの余白は未来夏に入る 佐久間梨江

句には隙があるが、精一杯気持を込めようと初々しい努力が感じられる。引出しの余白にどんな人のどんな手紙が入られるのか楽しみ。夏が来た。さあ出会いはどうなのかしら。

雪嶺集・前山集から推薦候補作をあげる。

沖繩忌 海鳴り海にをさまらす 岩井かりん
子子は満月の夜に立ち上がる 矢島 恵
空蟬や長生の欲果てもなし 古屋 洗

万緑やひとりひとりは無事の民
 黒糖を食む帰心なり沖繩忌
 掃鉢虫煮場は風の音ばかり
 一つのまに父逝きし夜の明けて夏
 甲斐駒ヶ岳は空の天守よ夕焼濃し
 木に登り瘧へとりたや半夏生
 花火師の深き眼差し沙羅の花

煙の木(スモークツリー)とは—南欧渡来の漆科の木

葛切や雲生んでゐる煙の木 榎木 幸子

東洋の窪つ溜にもいよいよ外来種の植物が雨あられと押し寄せる。昔ながらの葛切を口にしながら、目の前には雲をつかむような煙の木。花は米花、花柄が伸び、霞のようにけぶ

今月の秀句

短夜や沈むもならず漂へり 山崎 和之

一発触発。誤って核を動かしても間違ひなく世界の惨事に繋がる。真面目な世界が崩壊するはずがないとはみんなが確信したいことであるが、だれも保障できない。余分なことが余分でなくなる。ユーラシアの極東の果てに傘のように頼りなく浮遊している国日本。掲句は作者個人の呟きであり、生存の故地の現状詠であろう。寝苦しいのは短夜ばかりではない。狂気は欲と判っていても、強欲は手に負えないのである。

りの電車の床にべたりと据わる子どもたち。疲れているには違ひないが、元氣な子にある潮干狩をしてきたという誇りがいつか社会から失われている。子どもの老人化か。

一生を一日に縮め夏椿 原 保次郎

夏椿は沙羅の別名。朝開き、夕方には純白の花が落ちる。これが夏椿の生涯とは、理を待ち続けていた花のようだ。

みず叩き食うべ身ぬちのさらさら 山田 一政

「みず」は鱗草(蛇の消化草とか)の地域方言。「みづな」ともいう。(へでゆの主みづといふ菜を土産にくれ)(高浜虚子)が知られるが、例句が少ない。秋田から明快な作が寄せられた。

東大寺螺髪(の)そよぐ夏来たる 吉澤 清

大仏様の巻毛が戦々とは、これは大きな夏の到来。見物の小学生も歓声を上げよう。俳味がある。句は壮大。名人の作。

玻璃越しの魚のぎよる目や宵闇魔 原田 宏子

旧暦七月十六日が闇魔参。こは前日十五日の宵闇魔。明日が闇魔さまの休日とは、水槽の魚までもが、今宵限りと闇魔の威を笠に着て睨んでいる。ユーモアがある。

五月闇エレベーターにひだる神 古畑富美江

「ひだる神」はひもじい空腹感を演出する神。青葉闇の頃、エレベーターに乗った途端に疲れ、ひもじい感じに襲われた。古代人の感覚が意外にも現代人にも通じる不思議さがある。珍しい感じの発見だ。女性が抱くところに巫女性があろうか。

青雲集

夜蛙の勝鬨善光寺平 関 礼子

る。作者は戸惑いがある。一句は浮遊感を掻き立てるようだ。

悪態をつく舌六月の女 金子 圭子

男が女の品定めをしたという「源氏物語」(「帚木」)の五月雨月の話ではない。梅雨の月六月は女の出番。男に延々と悪態をつく。蛇のくねりのように蜿蜒とつく。芝居の舞台が見事に下世話な日常の話に下されている。武器の「舌」がつく。体ではない。現代世相を十分に思わせる。

夜濯の黒ばかりなる自嘲かな 森山 夕香

この頃下着からすべて黒系統。自己批判が強めか。出過ぎないような配慮など、夜濯をしながら。夜濯はそんな時間。

尾の長きさが江戸前穴子鮓 渡辺 文野

江戸前の穴子鮓を食べたことがある。「尾の長き」が面白い。

金魚鉢が華やか過ぎる。この感じはまともな加齢意識。ナイーブ過ぎるのかな。回復力はないか。感受性豊かな大胆な

絵画を見る、映画を見る。「やってやろう」という大それた気持を持つがいい。荒井良二の「いつもしらないところへたびするきぶん」を見る。秘訣である。

ぶよぶよの月昇り来る半夏生 児玉 君子

暑い最中、半夏生に意外や茹で損ねた卵のような月。この意外性への着目に自然の異変に気付いた鋭い感性が感じられる。

潮干狩電車の床に座り込む 下平 重人

堪えることができない子どもたち。例えば房総辺からの帰

善光寺平を眼下に高台にいる感じ。夜蛙の合唱がわあっと湧き上がる。人間どもを征伐して蛙が鬨の声を上げているようだ。こんな日がいつか来るのか、幻想は明快で、痛快だ。

つまらない手紙を出して四十雀 細江 毛玉

いつも反省している。失敗した。ああすればよかった。自分は「四十雀」のユーモアを用意して。鳴き声はいい鳥である。ペンネームが滑稽。

降り止みて空気はジェルや仏桑花 松井 弓

沖繩の真夏の驟雨夏ぐれが去った後の「ねっとりした」(ジェル)空気。すべてを含み、仏桑花(ハイビスカス)も真紅。

青春のフィナーレに似た晩夏光 鐘木ひろこ

誰もがこんな句を作ってみたい思いがあろう。夏が終わる。いまだ暑さ厳しい光にわが想いを重ねる。いまが一番と、おのずから若さを意識して呟く。さようなら若さよ。

岳集・青雲集から候補作をあげる。

集ふもの映す五月の御影石 篠遠 良子

倒木に鎌首もたげ蝮草 松本千代美

涼風や夫からの文納棺す 中村 博子

晩夏なり父の忌つんと鼻の奥 沼井由紀枝

人の世に空籠はなし焼茄子 三浦 土火

三伏や裾野あるやう目玉焼 神林 利一

夫の遺す小さな世界小豆蒔く 石川 良子

攻め焚きの炎柱真直ぐ夏の月 佐藤 初子